

喫緊の課題である、ここ数年の急激な会員数の減少と在籍年数の短期化は、さまざまな問題を浮かび上がらせている。これら諸問題を解決するため栗山氏は『戦略的ブランディング』を基本方針の一つに掲げ、会員増強に取り組む。まずは、地元メディアを中心にさまざまな媒体への積極的な情報発信を通じて、静岡青年会議所の活動を認知してもらうことから始める。それら一つ一つの活動の

積み重ねが、新たな静岡青年会議所のブランディングに繋がると栗山氏は考えるからだ。「何事もそうだが、物事に取り組むにあたって、意味なきものは存在しない」という考え方が、私の基本原則にはあります。人口減少問題や地方創生といった地方都市が抱える課題に突破口を見いだすためにも、私たちは創始の精神を抱き、変えるべきことは変える勇気と守るべきことは守る冷静さを併せ持つことが必要と考えています。年功序列型による縦割りの組織系統ではなく、時代に即した柔軟な発想と、自由闊達な意見が飛び交うスマートな未来志向型の組織に生まれ変わることの必要性を説く。J.C.II青年会議所は、国連に関する機関以外の世界的NGOでは唯一、国連ロゴの使用を許可されている組織だ。全世界のJ.C.IIメンバーが、この世界をより良いものにしようとしてきたこれまでの活動に敬意を払う意味でも、栗山氏のジャケットの襟にあるフラワーホールには常にJ.C.IIバッジが輝いている。「青年会議所の組織とそ

の活動が、誰のために、何のためにあるのか？という原理原則と、この街の負託に応え得る公益性の高い組織であり続けなければならぬ」という使命を、私たちは常に意識しなければなりません。しかし、絶対的な権限を持つ先輩からの指示を待つだけの

受動的で、厳格な規律に則った組織に固執してしまうようでは、次世代の青年会議所を見据えた時に、行き詰ってしまうのではないかと栗山氏は危惧している。何よりも静岡青年会議所のメンバー一人一人が、やりがいと目的を持ってチャレンジできるメンバーファーストを掲げること、で、会員相互の信頼関係や絆を育む1年にしたいと考えている。

戦略的ブランディングに基づく、静岡青年会議所の価値の創造を目指して

『公益資本主義』を基本理念に掲げて

地域経済の発展に寄与する

2018年度、静岡青年会議所の新理事長就任にあたって栗山氏は座右の銘である『為せば成る 為さねば成らぬ何事も 成らぬは人の為さぬなりけり』という上杉治憲(鷹山)の有名な一節をあげた。栗山氏曰く、上杉治憲がすべてのほじまりであり、家業を継ぎ、青年会議所に入会し、現在に至るまでの栗山勝訓という個人を形づくった言葉でもある。いつの時代にも、世のため人のために時代を拓いてきた先人がいた。だからこそ、社業のために、自己成長のために、そして、この地域のために、行動する市民として積極的に貢献できる人材になりたいと栗山氏は考える。「静岡市の推計人口が70万人を割り、若年層を中心に大都市への人口流出に歯止めがかからない危機的な状況の中で、その責任を市長や行政など、誰かの責任に転嫁しているようでは、いつまでたっても人任せの街づくりに終始してしまう。青年会議所の活動もまた街づくりと同じで、人任せの受動的な組織であってはならない」と気を引き締める。日本青年会議所に出向していた2016年には、全国から30人の小学5年生、中学3年生の男女を選抜し、ニューヨークの国連本部において『世界平和・持

■略歴
栗山勝訓(くりやま かつのり)
1979年生まれ。静岡市(旧蒲原町)出身。1997年東海大学付属第一高等学校卒業。2001年東海大学工学部土木工学科卒業。大学を卒業後、駿河重機建設株式に入社。2011年代表取締役役に就任。2008年青年会議所入会。J.C.IIでは、公益社団法人日本青年会議所 相互理解確立委員会、東海地区静岡ブロック協議会 ブロック大会実行委員会副委員長、世界に貢献する日本創造会議副議長など、日本青年会議所における重要な役職を歴任してきた。

持続可能な開発「UNSDGs」に関する事業に携わってきた。先進国の中でも、とりわけ日本国内の地方都市では全くといっていいほど知られていない。世界を変えるための17の目標である「SUSTAINABLE DEVELOPMENT GOALS」の啓発活動について、全身全霊をかけて取り組んでいきたいと栗山氏は意気込む。折しも静岡市の田辺市長は、若者を中心に2030年まで段階的に、この持続可能な開発目標「UNSDGs」を普及・定着させていく方針を正式に表明した。静岡青年会議所も静岡市とベクトルを合わせて、UNSDGsの普及活動に取り組んでいく。

積み重ねが、新たな静岡青年会議所のブランディングに繋がると栗山氏は考えるからだ。「何事もそうだが、物事に取り組むにあたって、意味なきものは存在しない」という考え方が、私の基本原則にはあります。人口減少問題や地方創生といった地方都市が抱える課題に突破口を見いだすためにも、私たちは創始の精神を抱き、変えるべきことは変える勇気と守るべきことは守る冷静さを併せ持つことが必要と考えています。年功序列型による縦割りの組織系統ではなく、時代に即した柔軟な発想と、自由闊達な意見が飛び交うスマートな未来志向型の組織に生まれ変わることの必要性を説く。J.C.II青年会議所は、国連に関する機関以外の世界的NGOでは唯一、国連ロゴの使用を許可されている組織だ。全世界のJ.C.IIメンバーが、この世界をより良いものにしようとしてきたこれまでの活動に敬意を払う意味でも、栗山氏のジャケットの襟にあるフラワーホールには常にJ.C.IIバッジが輝いている。「青年会議所の組織とそ

受動的で、厳格な規律に則った組織に固執してしまうようでは、次世代の青年会議所を見据えた時に、行き詰ってしまうのではないかと栗山氏は危惧している。何よりも静岡青年会議所のメンバー一人一人が、やりがいと目的を持ってチャレンジできるメンバーファーストを掲げること、で、会員相互の信頼関係や絆を育む1年にしたいと考えている。

会社経営とは世のため、人のためにやるべきことであり、青年会議所の活動もまた表裏一体であると考えています。地域との関わり、人と人との関わりは普遍的なものであり、人の営みとして欠かすことのできないものです。企業が社会に対してどれだけ貢献しているかを評価するのが「公益資本主義」の概念でもある。配当金や株価の高さが企業価値を押し量るのではなく、株主である企業が、事業で得た利益を通じて、どれだけ地域社会に寄与したかによって、その企業の価値が決まる。栗山氏は静岡青年会議所の活動を通じて、その道標になるための、新しい基準を作りたいと考えているのではないだろうか。メンバー一人一人の能動的な行動力と、より多くの力を結集することのできる機動力を生かすことで、その先にある会員の意識改革、IIマインドチェンジを促す。



「私たちが住む静岡市は、政令指定都市に移行した2005年から10年以上が経過した現在、全国に20ある政令市の中で初めて70万人を下回る深刻な人口減少に直面しています。このような時だからこそ、私たちは英知と勇気、そして情熱を持って、地域社会の発展のために時代に則した事業を行い、未来志向型のビジョンを掲げ活動していきたい」と語る栗山理事長に、所信表明と新理事長としての意気込みを聞いた。

旬／な／人

栗山勝訓

一般社団法人静岡青年会議所 理事長

イノベーションによる能動的思考で、胸の中の火種をまちづくりの炎に変える未来志向型の活動を目指して

世界をかえるための17の目標「UNSDGs」を掲げて

2018年度、静岡青年会議所の新理事長就任にあたって栗山氏は座右の銘である『為せば成る 為さねば成らぬ何事も 成らぬは人の為さぬなりけり』という上杉治憲(鷹山)の有名な一節をあげた。栗山氏曰く、上杉治憲がすべてのほじまりであり、家業を継ぎ、青年会議所に入会し、現在に至るまでの栗山勝訓という個人を形づくった言葉でもある。いつの時代にも、世のため人のために時代を拓いてきた先人がいた。だからこそ、社業のために、自己成長のために、そして、この地域のために、行動する市民として積極的に貢献できる人材になりたいと栗山氏は考える。「静岡市の推計人口が70万人を割り、若年層を中心に大都市への人口流出に歯止めがかからない危機的な状況の中で、その責任を市長や行政など、誰かの責任に転嫁しているようでは、いつまでたっても人任せの街づくりに終始してしまう。青年会議所の活動もまた街づくりと同じで、人任せの受動的な組織であってはならない」と気を引き締める。日本青年会議所に出向していた2016年には、全国から30人の小学5年生、中学3年生の男女を選抜し、ニューヨークの国連本部において『世界平和・持